



日本百將傳一夕話

八

~ 13
3566
8



門 13
號 3566
卷 8

續元
書

早稻田
大學
圖書
印

傳一夕話卷之八

東都
目錄

○ 畠山重忠

○ 土肥實平

○ 三浦義澄

○ 小山朝政

○ 佐々木盛綱

○ 平泰時

松亭金水謹撰

早稻田大學圖書館
昭 34.6.3 裝
藏書

傳一夕話卷之八目錄

○ 足利義氏

○ 平時頼

○ 以上八將目錄終

○ 上明實平

○ 山重忠

目録

東勝

休亭金水齋

百集傳一多言卷之八

鎮守府將軍上總

今良兼四代

左衛門尉致經勇

秩父六郎將恒之孫

平武綱 秩父十郎

從五位下伊予守

義家後三年合

戰二武功アリ

重綱 秩父權守

重弘 秩父太郎

重能 畠山莊司

重忠 畠山二郎

重保 畠山六郎

重秀 畠山次郎

畠山重忠

八百八十三代 土御門帝元久二年討死ヨリ
今安政三辰迄 六百五十二年と成

畠山重忠者勇而有力頼朝春侍
尤渥常為先驅宇治河之軍一谷
之戰奥州之役皆有軍忠為北條
時政被冤殺

古今著聞集にのち重忠法力あり時に八及を双の大力の士長居とのりの。
畠山と力を比べんてをむ頼朝乃て相撲せむ畠山とにに勝て長居が
肩骨を碎く後に廢人となり人々を恐怖しよ蓋重忠が勇力是に限り

畠山重忠の結

二浦夜笠攻の二八 和田長盛が傳小見えり。折重忠一族として二浦が佐殿小堂
 まるで撃つ。その所頼ありおあむ。畠山莊司重能小山田別業有重見才二人洛
 小在て年来平家小譽公以重忠その子三の道守り。二浦の一族と滅さんと衣笠
 の援へり考ふまじと頼落亡としてこまに逃げ

按るに重能の父有重 重忠の父 平家都て落りよとき迄は流表は供せし内府
 宗盛をまてて近く招き汝等二人の期小及び心で易む。属従がふと神妙
 して教びる所。さき何方までも俱まげまじ。汝等が子供家人まで。こゝろ東
 国小在て身ハ西海小在と心ハ東小通らん疾く在所へ帰る。若運令
 竭せし。世小在と彼がまふべしと宣へば重能有重兼り身ハ恩のふお小使のま
 今ハ後小因て將しとま。年来四恩と兼ありあがる。幸で君の難と見捨本玉へ

傳ふまじと更小立退る氣をあげまじ。宗盛再び宣ふやう汝等二人ありしを也。
 この戦ひ小勝べきあむ。親の子で思ふと貴き後き差別あらん。頼朝の神
 て頼朝小従ふべし。更小恨こと思ひまじ。と再三推返して宣へば。この上ハ力なり。と此
 暇をまじし。洛へ引返す。東玉へ下りけり。

治承四年十月初旬秩父次郎重忠武蔵の国長井の渡佐殿の陣へ参る。あま
 たり尙家隷する半沢六郎成清と招き。時佐殿の体とる。小飛龍の天小昇る
 かれ。故小八箇玉の大小名徒ひ藤をぞとのみのなり。吾もまその麾下に居せん
 とおかりひあがる。父と叔父と平家小在り。その故でして二浦小對し。小坪の争ひ衣
 笠の城とて攻まじ。今佐殿へ参るとも。懇に許容あつと。このと余何小討らんと
 のハ。衣清承了。小坪夜笠の戦ひ止して得ざるの義也。二浦も大く参まじ。妾
 小佐殿に教對あむ。まじ。四父君叔父君の洛小在まじ。世小隨ふ也。是まじ。所細



百將傳一話卷六

群玉堂藏板



百將傳一話卷六

群玉堂藏板

重忠宛を
 陽へ
 武州二俣
 川小
 戦死

らむ忠直の仁義と肯とま。小於て鎌倉の君長上下とまを稱して。その行ひと
則とたり

按るに本朝通紀小重忠源軍以下はとの條傳小細書とて。その時頼朝降
と評さんとま。然れども二浦の一黨遺恨ありんと忠とてせむ。このこととて
澄不後先。澄從容とて對ていそ。今天下二分。頼朝執志一ならず。降る
者と受むんば。忍らく大車成さるん。我曹積怨ありとのへども。私の讎とて以て。
國家の急と後小せんや。若し評し。あつと。言をよみて。評し。先評の
評小ありとのへ。武家評林小こととていそ。蓋し戸川越降らんと。請ふ時頼朝
二浦の一族小後せらば。澄とて。まうすに。降と評し。あつと。裁り。然れども
後とて。攻るハ。秋父は戸川越。あつと。故小之家と。讎となす。同書の自任のそく。
三浦從屬頼朝以。往由井衣笠之危難不更。其志源軍漸震至。重忠降下。

為天下同席和交曾勿鬱恨先國家之危後私之讎源氏家復之大
功其孰出其右乎可謂忠且義者欽憾太平一統之後未酬奮冠與父
讎戴天終身於牖下矣と見え。此段二浦系澄が活小掲げぬべき
も。もと。前文の因小あり。こ小書して参考小備ふ

かて島山重忠ハ八幡殿の舊例小慣ひ先登のゆで命せま。向ふ所とて。廢るぎ存
なり。後仲退討のとき。後仲小房一。宇治川小言名あり。一谷の關。後仲小。ま。後仲の隊
小房一。て。野戦の軍功あり。屋清の戦ひ小勇名と。顯り。奥及茶湯征伐のとき。例の先
登。ゆで。勳功多し。その餘の小車に功あり。今。奉て。等。あつと。比。その功の炳然とる。こ小其二三
と。奉ん。押。後仲小。在。て。礼。妨。て。あ。その。せ。あり。頼朝と。ま。て。征。さん。為。範。頼。後。仲。と。ね
と。て。宇治。勢。回。小。向。り。む。重。忠。先。鋒。と。て。宇治。川。小。條。と。馬。と。ま。の。し。う。ち。入。は。ま。下
武。隆。の。侍。人。ゆ。て。大。串。次。郎。と。り。の。月。ト。く。後。方。に。隨。ひ。が。遠。ハ。歩。立。の。兵。ゆ。て。思。ひ。の

外水深く。殊小重隆と著し。まば。遊ぎうめて幸トける。重忠見るとり右より。伸
 一。道の土帯引杭。目よりさくさく揚て十段をり。遊させあき。向ひの岸近くある時
 曳し。いで擲揚り。大串あさく者あま。筋斗うつて起あり。武虎の木の俵人大
 串次郎。宇治川の先陣。くし大音小名。あけま。教も味方の吐と笑ふ心著て。先
 陣。島山次郎。重忠二陣。大串次郎あり。このひ連しける。しあ。重忠島小馬を
 射させて。己さ。歩立あるに。か。拳劬ハ鬼ウ人。う。し。ま。入。感トあへ。し。あ。ん
 かくて。後。後。後。と。島山重忠。と。六。院。の。所。所。守。護。し。て。在。し。が。い。ま。ご。後。仲。の。存。亡
 知。し。ば。故。小。後。經。小。暇。と。て。之。百。餘。騎。と。引。率。し。三。條。河。原。小。う。ち。出。る。に。後
 仲。小。出。余。ら。雲。時。弓。矢。を。争。ひ。し。が。この。時。後。仲。ハ。十三。騎。に。替。ふ。さ。れ。て。敵。一。が
 ぐ。う。ち。負。て。退。く。折。り。う。萌。黄。系。威。の。道。と。著。し。茸。毛。の。馬。小。あ。く。る。武。者。と
 一。騎。踏。止。まり。縦。横。小。池。廻。り。ま。る。と。幸。ひ。教。と。替。島。山。が。勢。余。救。う。て。是。が。為。小

四。途。踏。小。あ。る。重。忠。こ。れ。を。見。て。吾。十。七。策。小。で。小。坪。の。合。戦。より。教。度。戦。場。小
 針。き。け。と。と。ぞ。む。ど。の。故。と。ん。ぞ。本。曾。の。所。内。小。六。四。天。王。と。交。え。る。者。あ。ま。と。
 こ。ま。い。夫。小。あ。ず。し。て。天。晴。武。者。よ。と。瞻。望。入。る。榛。沢。成。清。渠。と。そ。六。桶。口。今。井。が
 妹。あ。て。巴。女。と。本。曾。の。妻。な。り。内。小。の。童。の。ど。く。我。ハ。小。條。ん。で。六。一。方。の。お。し。と。て。
 弟。夫。不。妻。の。勇。婦。な。り。と。交。て。重。忠。然。も。あり。う。女。の。為。に。逃。こ。そ。ら。は。後。代
 ま。で。の。恥。辱。な。り。を。く。組。で。所。得。小。せ。ん。と。巴。と。目。か。て。池。さ。せ。の。間。ひ。近。く。あ。る。程。小
 本。曾。ハ。隔。て。傍。つ。つ。せ。ぞ。左。右。し。て。島。山。ハ。巴。が。弓。の。う。に。廻。り。道。の。袖。小。み。と。戀
 て。此。方。へ。曳。ハ。彼。方。へ。曳。く。互。小。雲。時。引。合。ひ。し。が。巴。が。馬。ハ。信。及。第。一。春。風。と。い。後
 良。かり。一。鞭。あ。て。あ。を。り。け。ま。道。の。袖。と。井。と。引。切。り。二。段。を。り。ぞ。引。退。く。重。忠
 ハ。呆。き。と。て。這。ハ。女。小。あ。ず。り。け。ま。実。小。鬼。神。の。拳。劬。あり。箇。根。の。人。小。射。籠。め
 ら。ま。ま。バ。恥。小。辱。と。重。ぬ。る。なり。引。に。如。ト。と。む。ひ。院。の。所。所。へ。泰。り。と。ぞ。重。忠。武

勇のこならびに始め小由のいで寛優りて懐く深く。和が小由をさく長下り。
 文治三年九月の以伊勢五浪田の四厨に重忠が所領地頭職なり。然るに重忠が月
 代実正あり。負部家総が弟從共の家産を奪ひ後藉を。家總及断る
 といふ。実正さう小兼引せむ。小兼於て社人共で鎌倉へあそむてを併ふ重
 忠月代の後藉を知らざる。あそむき兼度ある小由で所領四箇所を召上らむ。
 千葉小兼心小頼らる。然る小重忠その日よりして。夜中更小枕小著む。つやに
 勸むまじ。飲食せざる。七日小及べり。胤心小こまきと受へて。武衛小十。
 ちやこの程ハ顔も。平生小愛りてえいひつ。小由世の中ハ是までし。存きりい
 解なり。早く清免ありて。出ささき。以うと頼ひけむ。武衛法き思へて。乘
 恩免ある。となり胤心歎び。地所。重忠小こまきと傳へ。道中。管中に泰重
 忠ハ管中に到り。里見守老成が。上坐小ありて。左右で白眼各方より。吹入九そ

山恩小因て莊園を操る。の月代と擇む。きなり重忠日比清潔の志ハ他人小
 能。と自慢の心ある所。今度実正が不義小因て。大恥辱を身に請ふ。に惜
 く存る。といひ捨て。邊前。武藏国へ地下。主ぬ。梶原景時とまき。武衛小言上
 做りける。重忠が今度の重罪。奮功と思へ。石ま少く。窮速に。加へる。速小恩
 免あり。と渠ハ何と。言得けん。菅谷の飯小引給り。叛逆の風吹あり。衣被一族とも
 兼時在国小止へ。更小田新。あそむ。例の禪言と構へける。武衛半ハ是で。信下
 小山朝政下河辺行平。結城朝光。三浦義澄。和田義盛等。と下ま。如此の風聞
 あり。ひとまづ。使を。立ち。正さるべき。ま。小追討使と遣はさる。
 べき。旨。宣く。計らひ。中ま。一。の。命に。あ。く。を。察。その。可。否。その。考。あり。
 兼下朝光進。出重忠。小廉。直なる。君。由。う。知。る。百。集。月。代。の。不。義。に。因。て。遊
 く。出。勅。を。被。る。と。何。ぞ。以。て。恨。と。せ。ん。の。風。吹。大。虚。言。と。存。る。之。然。ま。く

夫の使てりて実存を正させらるべし。と憚る所なく中けの武衛と始めその中此令
 三ふ然るべしと中けとき。然るに四使の下河辺行平に命せらるる。崇を重忠と行
 馬の友とて。滿ちて交りあはる。緯を異にひひる。とこの言ひま。理あるに。即行
 平に命せらるる。異心あき。に於て。速小伴ひ来ま。と台命と。果て行平ハ武藏
 菅谷の館小池向ふ。まう多くの供人ハ二里なり。前小遣。一僅雨。二個の従者。を
 菅谷小赴き云。こ中入。は重忠。後。急ぎ。自身。出。途。へ。長。途。の。上。使。を。労。ひ。
 慇懃。小畏。る。行平ハ。両刀。で。傍。小脱。て。進。め。今。度。四。使。小。来。つ。し。一。箇。根。の。余
 心。を。存。せ。せ。忠。と。美。し。小。励。む。君。も。う。知。ら。ぬ。然。る。と。如。此。の。令。と。被。る。
 全く。後。者。の。所。為。な。ら。ん。四。使。小。来。を。よ。せ。在。下。が。肩。討。て。奉。つ。ま。し。の。心。を。あ。つ。と。
 是。下。が。言。外。小。彰。の。ま。し。り。在。下。正。路。を。本。と。し。て。敢。て。邪。曲。を。あ。ま。さ。ど。し。と。い。と。申。運

命の縮まる所。是。非。ゆ。き。次。才。なり。將。宿。業。の。深。き。と。感。む。と。言。ふ。も。終。り。は
 腰刀。で。す。ら。し。と。抜。て。腰。切。ん。と。毛。行。平。急。ぎ。か。止。め。貴。殿。忠。直。と。本。と。し。て。以。て。偽
 を。い。ま。せ。し。の。人。在。下。ゆ。ま。し。信。と。し。て。君。小。来。へ。友。小。文。つ。る。と。貴。殿。小。文。の。劣。る。べ。き。然
 る。貴。殿。を。針。て。し。の。人。四。使。あ。ら。ん。小。来。の。偽。り。を。針。る。さ。か。小。兩。刀。で。傍。で。脱。し
 貴。殿。小。野。心。の。あ。き。と。知。る。なり。元。来。舊。友。と。し。て。四。使。小。来。は。は。徳。便。を。針。ん
 為。の。こ。ゝ。矣。為。此。方。に。別。心。あ。ら。ん。や。ま。づ。止。ま。り。ひ。べ。し。と。練。め。ら。ま。て。重。忠。ハ。忽。刀。を。執
 小。收。め。酒。敵。を。出。し。遠。路。を。勞。ひ。や。ら。く。興。を。盡。し。たり。か。て。行。平。ハ。重。忠。を。伴。ひ。孫
 倉。来。著。る。ま。て。重。忠。提。原。景。時。小。對。し。在。下。野。心。を。存。せ。せ。ど。の。す。一。宣。く。執。達
 あり。と。ま。り。け。し。は。提。原。景。時。然。る。に。於。て。野。心。あ。ら。ぬ。紀。清。文。と。進。ら。せ。し。の。人
 重。忠。傳。て。冷。然。ハ。若。重。忠。武。勇。小。慕。つ。諸。氏。の。財。宝。と。奪。ひ。とり。渡。世。の。縁。と。さ
 ま。し。の。と。ま。り。後。代。ま。で。の。恥。あ。ら。し。と。武。士。の。老。の。時。に。より。孫。叔。以。の。を。は。は。却。て

己身の面目なり。君脱に世をとりぬひ。多幸の奉公忠義を肯とま。然るに活る
 難小逢工。偏小運の頼くあらん。重忠が心言ふも頭相違あぬに。紀清文の
 進らせん。紀清文を用ひて。所犯復籍のうりあり。重忠偽あはれ。未だ君を
 よく知り。百も。此段。眞しく執達あれと。從容とて述はま。景時日。経方。前
 小泰。そか。と言ふ。武衛。正と。波多。何と。宜ふ。と。由。なく。行平。と。俱。前。百。ま
 更。小。その。宣。の。ぞ。で。四方。八方。の。四。物。語。小。替。く。時。で。移。の。頼。て。奥。入。の。ひ。ら。ぶ。
 堀。藤。次。親。家。と。して。出。太。刀。一。腰。を。下。河。を。行。平。と。賜。ひ。ける。今。度。を。異。を。計。ら。ひ。さ。
 以。貴。美。と。こ。そ。知。る。と。これ。は。より。後。文。治。五。年。奥。及。泰。衡。追。討。の。とき。泰。衡。の。家。士
 由。利。八。郎。を。宇。佐。美。実。政。擒。て。柳。營。小。替。たり。天。野。則。景。功。を。嫉。之。実。政。と。相。争
 ぶ。て。その。証。迹。分。明。あり。む。因。て。梶。原。景。時。を。して。その。事。実。を。正。さ。し。む。景。時。由。利。が
 前。不。到。と。跋。扈。して。同。ふ。て。い。く。汝。の。泰。衡。が。家。士。なり。其。偽。を。繕。り。作。る。べ。く。は。折

汝を擒り。何れの甲冑と著せ。在のまに言せ。とい。由利。其の。无。終。を。怒。り。
 殿と白服てのける。汝ハ幕府の臣なりや。そ。ま。及。四。館。泰。の。秀。郷。将。軍。の。嫡
 統。也。ま。も。之。代。法。守。府。將。軍。の。驛。で。汲。む。汝。が。主。の。人。と。い。ど。の。妙。の。下。き。无。終
 と。奈。せん。剣。や。吾。と。汝。と。何。の。り。の。勝。劣。う。ある。運。盡。囚。人。と。な。る。と。い。勇。士。の。慣。ひ。武
 門。の。事。なり。今。の。雜。言。太。及。なり。汝。が。為。何。を。言。ん。と。辱。し。あ。け。ま。景。時。は。ま。さ
 り。う。も。な。く。引。退。く。頼。朝。再。び。重。忠。と。して。その。と。と。同。し。む。重。忠。様。と。正。一。容。と
 飲。め。由。利。小。對。ひ。て。馬。の。家。教。の。為。小。縲。紲。小。遇。ふ。古。今。例。が。ま。ら。ば。又。汝。で。恥。辱
 と。せ。ま。我。主。頼。朝。の。繫。囚。と。な。つ。て。更。及。小。縲。せ。は。然。と。も。佳。運。竭。む。今。天。下
 一。統。小。飯。の。貴。客。恨。恥。を。懷。く。と。あ。る。と。ま。と。い。奥。羽。の。豪。士。素。より。その。名。実。未
 小。夷。く。故。小。軍。士。皆。勲。功。と。え。ん。が。為。小。收。獲。ま。る。所。で。論。ぶ。て。定。ま。ら。ば。折。何。の。甲
 冑。と。著。せ。る。と。と。捕。ま。せ。ま。欵。と。述。げ。ま。由。利。八。郎。の。い。と。と。重。忠。を。尙。の。男。の

奇怪小似老同所をりて公小對へん吾を捕へし其系の獲を著し鹿毛の馬小
 宗と果果と実政なり。因て宇佐美と稱し多しと重忠が容後と觀るに足下
 按るに由利八郎。豪雄の父えありにたり。頼朝徵てまて見のひ渠小對ひて
 宜ふやう。汝が主恭徳の奥羽二及びを併吞して。威て東國小振ふて。故年因て
 吾東征を苦しむ。然るも思ふ所と殊小。僅小二十日と踰せし。恭徳殊依
 国内平定し渠十七萬の貫首とて。おのどく曉まらぬ。百日の支えざる。
 志發ふ小堪たり。と言の下より由利八郎。宜ふとく主の恭徳西及小元帥とて。
 帶甲十萬豪雄救千。素より守兵寡とせむ。然るに幕府發向し。兵を
 て諸の要害を固めしむ。對戦小及び利を失ひ國瀕死し。恭徳由。終小
 守を棄る新賊臣の為小弑せしは。然るもこの大敗宛然恥辱とせざる小
 足らむ。平治の昔。義朝の東海十六國を平治せしといふ。た一日の支えざる

して。遂小長田が為小弑せしは。義朝と恭徳との甲乙孰と。と爽小のひけは。
 左右言て。然るに頼朝のまのひげも。幕と垂て入る。然るも其忠
 勇と感下。繫囚と免し。この遠の重忠小拘りし。ぬど由利が勇壯万人小冠
 たるて掲げぬ。兎と勵まき。一端とたるものこ
 此外の物語種々あり。事長けし。この大畧と恭徳の重忠の節操忠烈。孰
 たる存小ん。然るも不幸にして。北條氏が盛毒の為小まづ。この嫡子六郎重保由
 井の漢小討まじ。この時重忠武蔵小在り。叛逃隠れ。かくて。孫倉の結ね
 大軍と發し。武及二候川小軍に重忠の罪と謝せんが為。從兵百二十餘騎たる
 也。而も素肌にして。孫倉小赴く。踏みて。かく。本田近幸。榛沢成清。かくて。陳
 謝するとも甲斐なり。彼が堂々軍勢。百せり。我小まら。何とて。敵對へし
 一先本國へ引退き。語をを俟て。我ふべし。この重忠。敢て。今。敵軍法。大あり

との兵を還してとて侍バ實小隠謀あるに似たり。謀つて逆兵の名を請ふが独
 不長の名で贖のころ。先君知人の明を損ふ吾為る不忠びざとして速小敵軍小統ま
 従兵と左右小して挑三戦ふと殺刻多く致とて切て愛甲と郎。李隆が為小討ま
 う。干時歳四十二とある。二男重秀逆半成清をの餘の兵士とふと小死と。あつ
 近き以印行の書に委しけま。其要を摘て紀也。元久二年

按るに本朝通記にのり。重忠天資寛大事于君不貳交友不詐不
 挾勇功有智而不争。有允文允武萬邦為憲之風然不時時不
 君君北條氏羅北難之權忠意義志虚一舉嘘々天道莫知歟
 使忠臣有此災云云重忠不幸雖遇不虞之戮其名光被四表德
 輝無後裔雖世移星廻善行長残方策後世何可不想乎と
 見えり文長けま六摘要せり

鎮守府將軍良

兼四代孫左門尉

致經末子

賴尊 山邊禪師

武藏住後子孫

相模國土肥住ス

賴尊四代孫

平宗平 中村座主

實平 土肥次郎

遠平 土肥先次郎

維平 土肥先次郎

義盛叛逆時味

同心生捕建會

三年閏九月誅元

倫平 土肥先次郎

土肥實平

卒年未詳人皇十六代後鳥羽帝の御宇を
今安政三辰を九百六十餘年

土肥實平者從賴朝于石橋于

房州到處有軍功遂攻一谷之

正面

按るに賴朝卿始め兵を奉りて石橋に敗せし。土肥の獨に隠
 り。その時實平一人始終その傍を離さず且人の目と忍びその妻女を
 船を矯りその命を全うせむ。史より其節が誇れ至り。議して安房に渡り
 ぬ。よ。実平が討らひて。さ。は。送念に於てその大功並びあき考とのせん

土肥実平の始

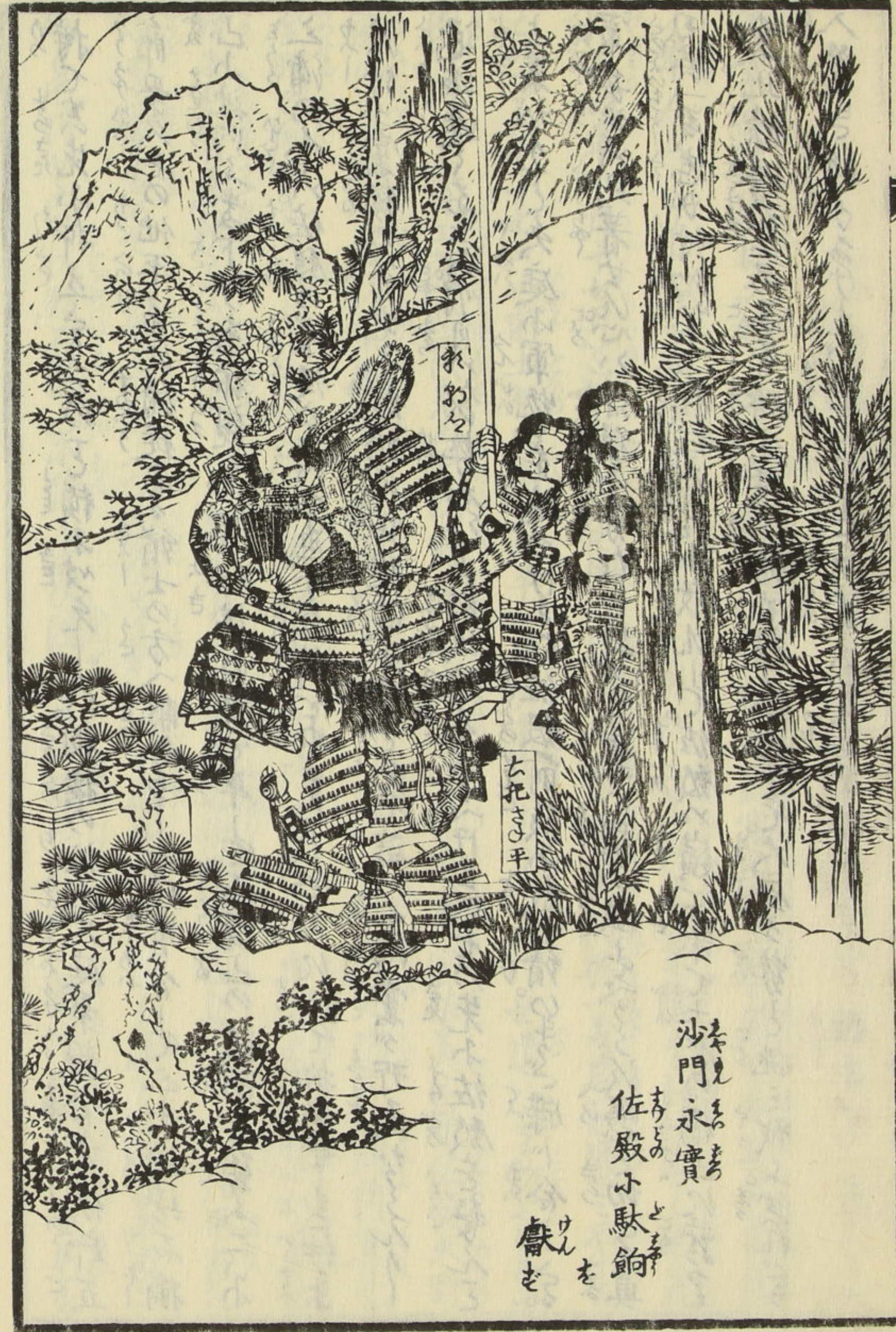
家系前小父は少如し。右兵衛佐頼朝高倉官の令旨を得て。兵を夏及
 小峯んとりしとき。まづ初め小峯の月代山本判官兼隆を討べし。實平
 治承四年八月十七日とて期とて。同て是時石橋及実平共一發忠を憑こりて
 とのりて。十七日以前土肥次郎実平と伴ひ。糸向とて。作せ遣はさる所之に
 同て月十六日。土藤介茂光土肥次郎実平同時四郎及実平宇佐美之弟佐茂天野
 藤内遠家加藤次景康を依志ある輩来會以。同て佐殿一人宛次方に用所へ召て。
 合戦の間之を殺せしむけり。こ小軍後定まりて。月廿日の夜山木が飯小が
 終小判官兼隆をうち滅し。然もともとの東近郷に退まなく。又平家に
 志ある輩定めて佐殿を討ふべし。先づ則て人を征まの壁へあり。遅くまはさふあ
 びして。月廿日佐殿石橋山小陣し。院宣を四旗の横紙小着中四郎惟重を

持て。先小押立なり。右と頼朝の住人大庭景親合才保野五
 郎景久その他平家に隨從者。諸士の方へ觸れり。その勢合して二千餘。石橋
 山小陣向ふ。下伊东祐親也。二百餘。勢を率して石橋山の後面を襲ふ。こ小
 三浦の人々の佐殿の催促を得て。進出せしむ。供多に圍て抑留せし。伊东
 法師が黨類の茅宅を焼燭以。祐親遙小煙を見。這は三浦黨が所為なり。り
 退治遅く。あまが月日の勢加へり。征伐難長るべし。右先小佐殿を撃んと
 上策なり。と矢庭小軍勢を進めけし。佐殿前後小敵を靖けし。牒ト合し。る。
 軍兵皆に到着せし。心ハ赤猛小勇むし。と。寡ハ衆小敵まはさる。以憑こ切。真
 田共一發忠の討死なり。右往左往小散れし。佐殿の嶺に攀て。土肥の相山に誘
 り。北條時政の子時時主從十誘をかり小あま。大庭が勢と挑。然れ。中
 入。新よりけし。筋力疲。と。峯小の登。かく。やく。難。せし。を。



〇十三

永安



沙門 永安
佐殿 小駄 餉

齋 在

おのり

七把子平

加藤五郎景員、同藤太光員、同藤次郎景康、宇佐美之郎祐茂、堀藤次親家、
月平次実政、一平真治、こと小加らんと此著る、時政政を左右小揮つと吾くハ如
何小ありあん、之佐殿の道性方、氣遣りく思ふ、こと、又峯嶺小分登つ、尋
秘のへとありける、ゆ、然らば、このひて件の人々、土肥の摺山を志し、救町の途程を彼方
此方と心を勵まし、攀登、且、佐殿の大、節木の下、小、ち、の、土肥次郎、実平
の、道性、の、侍、つ、ま、互に悦び、の、の、その、同、小、大、庭、侍、赤、軍、兵、こ、と、勢、入、と
覺、く、岡、の、邊、地、を、動、を、か、て、の、小、在、さ、ん、と、心、許、あ、れ、さ、な、ら、う、箇、斗、の、人、救、せ
り、も、蒐、向、ふ、と、の、を、給、あ、さ、さ、ま、づ、の、冲、に、入、て、替、く、難、を、避、ん、ぬ、と、人、の、後、さ、る
時、土、肥、実、平、ま、り、て、の、ま、う、這、入、屋、竟、の、所、あ、ま、と、君、入、小、在、ま、さ、ら、假、令、向、月、で、経、
と、て、也、実、平、一、の、針、畧、を、り、て、隠、し、奉、つ、ら、ん、と、安、し、の、大、勢、一、所、小、あ、ら、う、あ、ら、う、小
隠、し、裸、さ、ま、也、却、て、禍、を、曳、出、さ、ん、今、雲、時、分、夜、と、時、を、候、こ、所、要、ま、ま、と、の、小

人々兼統せま、え、う、命、の、君、に、捧、ぐ、危、急、存、亡、針、畧、が、死、秋、小、殊、三、て、救、く、ん、と
本、意、あ、ら、う、と、忠、膽、面、小、彰、り、ま、て、退、く、氣、色、ハ、あ、ら、う、ざ、り、け、る、実、平、は、て、その、言葉、
実、小、最、も、極、中、君、小、忠、を、存、ま、る、者、誰、も、か、く、と、あ、ま、り、け、ま、さ、ら、ん、と、開、ハ、一、を、お、つ、て、
其、二、を、知、ぬ、針、ら、の、今、の、別、離、ハ、後、に、大、あ、幸、な、り、今、脚、の、小、葛、藤、教、の、為、小
見、出、さ、ま、て、主、従、と、申、て、身、と、失、り、何、と、必、て、舍、替、の、恥、辱、と、雪、ぐ、期、あ、ら、ん、や、么、私
命、と、金、う、し、て、針、策、を、廻、し、後、竟、小、勝、利、を、得、ん、と、愿、り、け、ま、と、言葉、と、場、理、
を、推、て、その、得、失、を、辨、け、ま、佐、殿、の、実、平、が、中、を、針、道、理、あり、各、ひ、と、ま、づ、退、後、
と、頼、朝、世、小、あり、と、使、あ、ら、う、必、未、著、る、事、と、懸、小、宣、ひ、け、ま、今、ハ、ま、給、方、な、り、各
獲、の、袖、を、絞、つ、ま、と、系、あ、ら、う、落、失、り、土、肥、実、平、ハ、佐、殿、を、ま、づ、僵、木、の、冲、小、隠、し、軍、兵
の、退、く、と、候、ま、下、大、庭、等、小、未、あり、の、冲、と、怪、け、ま、と、尋、秘、ん、と、せ、と、梶、原、宗、時、遮
て、こ、未、あり、佐、殿、と、杖、し、と、則、景、時、が、伴、小、あり、か、て、その、晚、に、及、び、北、條、父、子、と、小、到、の、管、根

の別表行実の弟に永実との法師あり。兄の行実と心合せ。汰餉を齎し。尋ねて
 佐殿小奉る。主従餓小條三。六実小千金小換。と大小心小感。トの用
 て実平傍より。世上泰平あると。永実と管根山の別表職小補せ。とのと
 執。まじり。とあ。初て永実を案内。若く。管根山小到。より行実が。好。未。諸人
 多。く。と。思。り。と。則。永。実。が。坊。小。入。替。り。休。息。の。と。の。行。実。が。父。良。守。の。六。條
 判官為。及。び。左。典。廐。義。朝。小。好。と。有。て。別。表。職。小。補。せ。る。時。住。良。波。河。の。田。家。人。小
 畢。文。を。賜。り。て。行。実。を。介。抱。せ。し。と。令。せ。ま。り。と。あ。れ。り。夫。等。の。善。好。と。志。や。ら。ん。
 か。の。の。け。も。と。ぞ。破。え。り。夫。より。後。土。肥。次。郎。實。平。が。針。ら。ひ。て。密。に。船。を。仕。立。美。徳。が。海
 より。籠。り。と。き。安。房。へ。渡。り。あ。ひ。て。より。諸。玉。の。軍。勢。從。ひ。属。と。因。小。草。木。の。麿。く。が。如。く。
 於。て。鎌。倉。へ。入。り。平。家。を。滅。び。て。天。下。一。統。し。總。遣。補。使。と。な。り。の。小。偏。小。其。始。
 土。肥。實。平。が。昔。心。小。ま。り。か。て。同。年。十。月。廿。日。相。模。の。國。府。小。著。り。兵。と。奉。り。

時より。僅六十余日あり。東国大半定まりて。覇府を鎌倉小用き。の。諸。將。勇。士。の。補
 佐。より。ま。り。乾。損。義。経。の。勲。功。に。よ。り。所。あ。ま。と。脱。に。石。橋。の。役。の。大。難。を。脱。し。の。小。實。平。が。
 美。忠。の。致。す。処。因。て。天。下。一。統。の。後。も。厚。く。と。賞。し。の。よ。り。さ。も。治。承。四。年。十。月。廿。四。日。依
 殿。鎌。倉。小。入。り。勲。功。の。賞。を。行。り。と。小。於。て。後。田。五。郎。小。作。東。武。者。次。郎。小。首。と。持。兼。次。
 ます。大。庭。之。郎。景。親。降。人。と。な。つ。て。小。系。は。萩。野。五。郎。季。重。小。石。橋。山。小。佐。殿。小。思
 口。を。り。若。かり。と。て。門。外。に。於。て。首。を。刎。ら。る。凡。そ。の。他。小。首。を。刎。ら。る。若。かり。合。六。十。餘
 人。と。破。え。り。か。て。山。内。滝。口。之。所。に。四。郎。の。兩。人。ハ。佐。殿。より。廻。文。の。こ。き。今。平。家。の。登。る。に
 佐。殿。流。囚。の。身。を。以。て。兵。と。奉。り。と。合。つ。る。ハ。富。士。の。山。と。丈。越。之。嶺。に。在。り。の。を。氣。の
 窺。ふ。小。異。あ。ら。び。と。思。は。し。て。徹。に。應。ぜ。と。然。る。に。今。田。橋。小。枕。き。大。庭。小。曳。出。し。佐。殿。自。身
 へ。出。て。汝。如。此。と。罵。り。と。ぞ。今。か。世。を。取。る。と。り。り。け。を。父。祖。累。世。の。家。人。と。て。大。庭
 に。從。ひ。り。を。寧。ろ。く。奈。有。怒。め。難。き。所。なり。と。是。速。小。首。を。刎。り。と。土。肥。次。郎。に。令。せ

らば実平畏て兩人を曳出さしむるに言ひやう。滝は兄弟その始り。悪はあまのこ
 あらまを累親に蒙りて怨敵とある。重くの罪ありといへど。集まらば祖父俊通及び父俊
 綱兩個とも平治の乱に敵小俱し。随分忠誠を抽て脱小討死を致せしと君
 小のよき知一良一然るに集ま思ふ心よりして思慮申す。悪はなり。言者小侍其
 罪をりて首を刎らば父祖の幽魂苦の下して。いふう歎き存せし。新帯を
 没収せしと今を助けて俊綱等が奮功に報せし。いふう頭殿の口昔掬小の
 たりひをん然りといへど。彼兄弟後日縁起など巧むき。若小せゆればその後ハ口
 心易くべしと再三練めまじらるる然らば父祖の功小免し。能小討死とありけし。其
 実平願のまことよりて彼兄弟にひ合め世帯を没収し。鎌倉を逐放ちり。いふ兩人
 大不悦びて。感涙を流し。ち還すとあり。其條をりて実平が仁智申推て知るべき
 なり

鎮守府將軍良兼
 四代孫致經ノ二男
 村岡小五郎忠通
 五代
 平義明 二浦大助

三浦義澄

卒年未詳年歴不全

三浦義澄者亦頼朝之士也其父義
 明為頼朝守城而死義澄處處軍
 旅從行居多

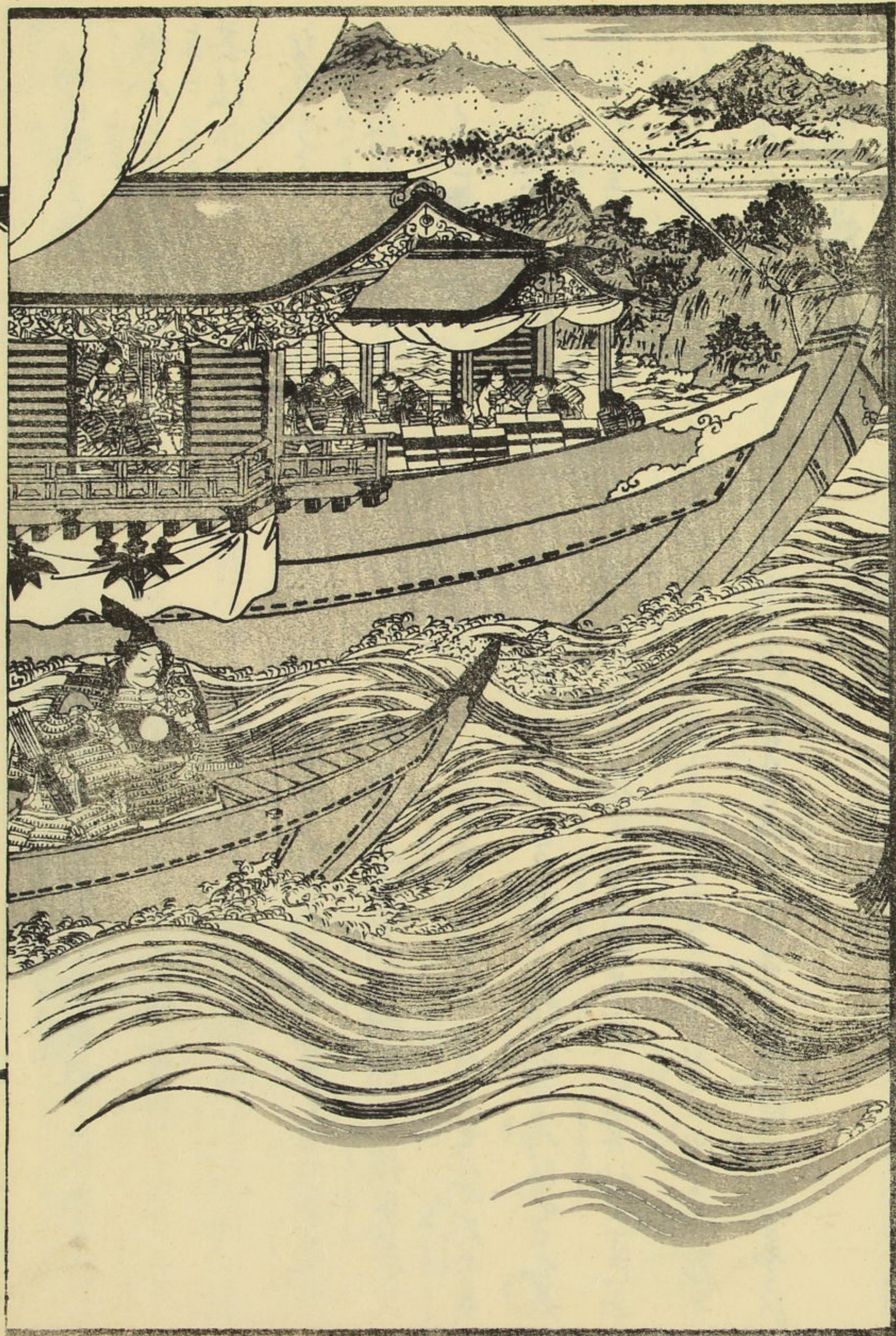
義澄 三浦義澄
 三浦小別當
 義村 平六兵衛尉
 有綱 山口次郎
 重澄 大隅前司
 胤義 平判官
 泰村 三浦若狭守
 宣治元年六月五日
 法華堂於自書

義澄父の遺命を守り三浦衣笠を捨ててより頼朝に隨ひ忠義を竭し。天下
 一の功を立す。孰そ右に出ん因て露遇志渥し。然るにその孫泰村の時及び
 一族光村が縁起に与し。且執權時頼朝が實を害を還て侮り。終に一札を引出し。
 實治元年夏六月一族法華堂に自殺す。父祖の忠を空あうた

二浦義澄の結

初め頼朝石橋山に兵を奉りふとき、催假ふよりて出渡せしうと九子河の洪に
 より心あらずに抑留せしむる石橋の軍散ばりて、二浦へ引返りその折る。秩父小遇て
 一戦を逐味方大勝利せしむと、秩父の河を語らひて先途の恥辱を雪
 めん為に夜半小押寄るに、衆寡敵するに能はず、父大助義明を不狂まりて討死し。
 義澄及び一族を落し、頼朝を輔けしむ。そのとき義澄の傳及び重忠を伴ふも、粗述べ
 ざるに、そのとき等々合戦観るべし。かくて治承四年八月廿九日、頼朝土肥実平と相俱し。
 扁舟小掉さして安房北平北郡、頼朝小著のふしき、北條四郎時政父子、二浦義澄
 以下、輩あつて、小系つる、教日の誓念を返らさず。是より後、義澄八君の侍を離
 はりて、かく、彰の形小副が如し。十月廿四日、鎌倉より入る、諸士勲功の賞を行す。
 時、義澄を二浦介とす。その餘の軍士新恩に浴し、或は六本外に安堵せしむ。十月

十二日、鎌倉新造の四亭小枝渡あり、上總権介房兼が宅あり。二浦義澄のふしき、
 頼朝卿送念に、覇府で関の始なり。十月廿日、二浦介義澄始めて、梳飯を奉
 はりて、是より以来恒例として、重臣文智奉はり。東鑑に、頼朝より、二浦義
 澄ハ、鎌倉草創の后として、既に重忠の條、小ゆさぶ、重忠ハ、俱に天を戴さざる父の
 離なり。然も、是より東国小放て、一族多く、武勇勝進。智殊軍界、重忠が、右小放りの
 ありきを、渠君の麾下に属さば、東国盡く、從がひ、魔き。忽ち、天下平定ありん
 されば、吾小放て、然故の思ひを授さむといへど、渠が降るを容ぞんば、国家の為且
 君の為小善らんと、慮ひ定め、君より、内慮のありしとき、更小怒とを授さざるを
 のみ、放て、是より、後、序を、内慮を、難へて、更小憚といふこと、忘さざるが如く、
 國て、先哲の道を、評し、思ひ、且、義ありし、この、個、国家平定の後、その、怒とを、報
 ふことなく、その、身、牖下に、死せざるを、その、行を、幾つとも、怒と、この、余ありに、
 二浦



百舟傳 八子卷六

〇十八

洋堂藏板



三浦北條の輩
安房國胤島小
佐殿小
再會也

百舟傳 八子卷六

洋堂藏板

一偏の端とらんを。其後和平慈ひ国家を奉る時小おまび甲乙八何方の戦ひに。父兄を討て者なり。今より讎を報いんと。黨を結び人殺を率て。ことと撃つること。父ひと度君の為小怨を解て重忠し。率て月あうるに及び。時節を俟更めて。父の讎とて。ことを撃つ。動くの端を閑く。ことを忠とせんや。大介義明城小死せし。頼朝の為小さる。義澄讎を授まざる。その頼朝の為に。小離して重忠と撃つ。君の羽翼と鍛の理なり。桓公の糾を殺す。管仲と小死せざる。この君の讎を桓公に仕え。一が天下と糾を小至る。管仲の。是り。常人に。この行て。不殺の汚名免る。是る。予が。臆脱是。非。後。の。讎。老。の。端。を。俟。の。と。

鎮守府將軍秀
郷三代左馬允兼光
五代孫
藤原政光 小山下野
朝政 左衛門尉
宗政 長沼五郎
朝光 結城七郎
上野介
長村 五郎左衛門尉
時朝 修理權大夫
時長 左五門五郎
宗光 七郎左衛門尉
政村 阿波守

小山朝政

人皇八十六代 四條帝 嘉貞四年四月 壬午 卒 今安政三辰 追 六百十九年 成

小山朝政者秀郷之胤 治養之乱起 兵於野州以應頼朝 時志太義廣率 兵數萬來攻之 朝政纔將數百人擊 破之 其後與弟宗政朝光處處戰場 相共從焉

家紋二ツ巴朝光と相与に南都に於て入戒入道以法名生西朝光法名月阿との

小山朝政の始

女自家系前にいふ如く如く。祖先より以来世々下野小住して武居て潰さるるを
 源家に志深うりける。因て治承四年九月二日佐殿所書とあるは小山朝政
 下河を莊司行平豊清権守清元葛西之部清重等に遣はさる。あつて是より
 入侍らる志ある者を相結らひ奉向せきより四清あそ明まは治承五年改元あ
 つて。養和と号らる。この年二月小住志太先生後廢ハ元来源家の一族あると。
 忽地骨肉の好みを忘れ孫念を攻滅さんと一休其力の者を結らひ。その用意頗る之
 小下野の住人良利又太師忠綱ハ朝政一家よりといへども人の心は種々ある。渠ハ
 平家に志深く既に去年高倉宮ハ縁叛の時平家小房一殊に宇治川の先登
 とて朝政を滅し宮でも射奉はる功に誇る威名を揮ひ朝政と其中善からむ。
 朝政ハ渠を憎み折あつて討果さんと。その便宜を窺へば忠綱もまことりを得て小山

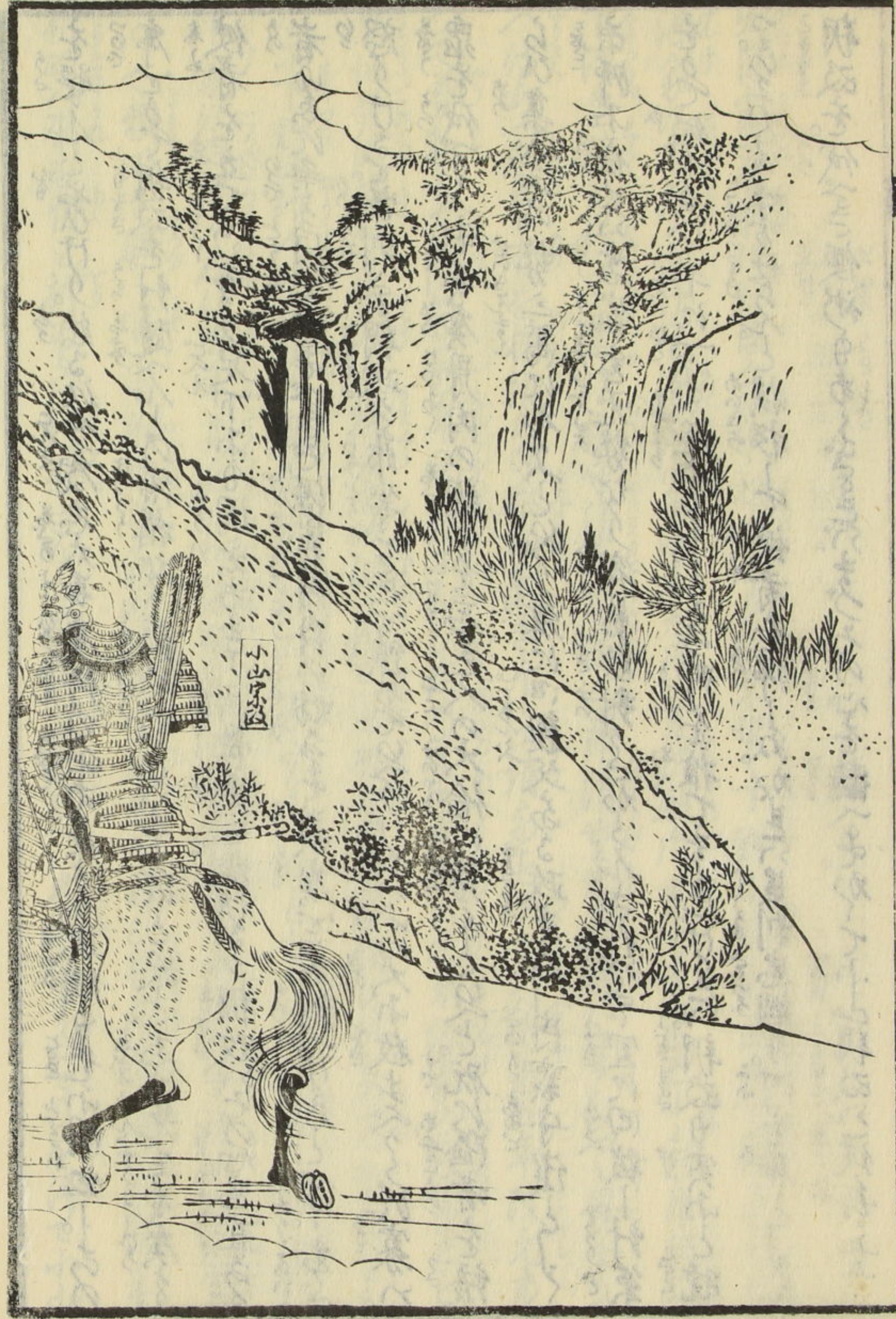
を殺んと欲ひけり。然るに今度志太後廢伴の企あるより。忠綱も是れ同党なり。その
 序として朝政を討隨へんとの結構なり。朝政初といふはつとといふと志太先生後廢より
 使者をきて云くかり。足下小由同党あり。其意を承りて朝政の心忠直ある
 者ゆゑに争う同党なまへま。源家再興の妨るも義廢とて討げせよ。心中まじ
 怒りける。物別る朝政が弟等とてて練めていりける。小の大敵とてつて寡ハ
 衆を依へるも義廢骨肉の親を忘る人。大倫に背くといふと既に強者を結
 らひ集め。その勢之萬に及ぶこと。殊に四親父ある政光ハ内裏守護とて
 弟師小住せ。家系を元勢なり。容易敵討がこからん。されど宣に回被し討策
 をして彼しを平に。一由逆あつて。その理を推てまじけし。朝政由実ホと腕
 つ。小由の思惟方はらんと。挨拶して使者を拜しぬ。かまは良利忠綱も。何を名とて
 朝政を依へる便柄もあつて。まづその心を翻へま。かて小山朝政ハ從兵五十



百将傳古今

〇六一

群五堂藏板



百将傳古今

群五堂藏板

誘汗王を招て野木の宮に色に出張し。長廣が便宣を俟ける。長廣は月夜のように。使者の教命に依り勇三郎を踏次の妨なり。と名鎌倉へ進發せんと常陸を立て。月廿四日野木の宮の色に到る。長下朝政の登り長木の沢地獄谷あとの所へ兵を少く領遣り。或ひその者の農民を籠林の梢に登せり。相圖を以て一容に閑の姿を揚させり。六元来小勢なりといふ。その声研に響きあひて宛然多勢と成えり。六元來先隊の兵思ひ申より。大不意に四途路不ありて。礼を立折とぞ。これと朝光の強まる兵を一所に纏め。元元之に斬てかき。然るに不臆し。る。復兵急に攻めつらむ。その大軍崩れて。支えんとする者も。長廣大不意とぞ。か。小勢に悩まされ。退く。と名あり。と自ら申す。夫も番の朝政目も。切て放つ。その兵。道に朝政が胸板に中し。けし。と。鎌倉より。長廣と大に朝政が。郎從太田菅五永代。次和田次郎。池次。藤法。法次。藤。ま。倉。朝光が。郎。保。志。思。と。并。さ。と。入。

長千の勇卒にて。今日ぞ王家の一大事。と。長由引。昨日来の勇。凡百倍と。政變にぞ。長廣が。長多。といふ。欲心熾盛の隘者。ま。野伏の類。ひ。小。と。利の為に。誘ひ。と。若共。ま。此。時。命。と。捨て。戦ふ。べき。ま。あ。ぬ。に。礼。と。り。か。る。所。に。五。郎。宗。政。の。朝。政。の。弟。あ。る。が。先。日。より。鎌。倉。に。在。る。志。大。長。廣。逆。心。を。公。大。軍。政。登。る。と。成。え。り。ま。依。教。の。軍。議。あり。て。ま。と。逆。ひ。怒。ん。為。緒。羽。を。突。向。さ。し。め。ら。る。宗。政。始。め。の。從。弟。あ。る。岡。次。郎。政。平。と。一。所。に。鎌。倉。を。打。立。し。と。政。平。の。途。中。より。心。變。つ。と。て。宗。政。に。別。と。長。廣。が。方。に。赴。く。と。小。政。て。宗。政。一。人。採。り。採。り。で。就。著。し。が。今。の。合。戦。最。中。に。て。雄。雄。の。い。ま。と。分。と。ぬ。小。朝。政。が。日。来。より。秘。藏。し。て。伺。垂。る。鹿。毛。の。馬。主。に。離。と。馳。巡。る。せ。り。と。り。ち。強。き。依。と。そ。兄。の。朝。政。の。正。しく。討。た。る。ら。あ。命。生。て。何。う。せん。と。り。馬。に。鞭。を。加。へ。長。廣。が。救。百。誘。と。中。へ。躍。り。入。る。宗。政。生。年。二十。歳。從。年。十。餘。誘。り。て。從。横。に。斬。之。は。長。廣。が。乳。母。子。に。多。和。と。七。太。と。い。ふ。の。宗。政。を。近。付。と。と。立。塞。り。て。防。ぐ。所。を。宗。政。弓。に。矢。う。ち。

番ハ兵集と切て放て去れ和山七太背の骨小遺失とて馬より墮餘たふれて去
 廣ガ右の腕を射削りて血ちが度候はりとあひけん野木の宮より坤の樹蔭を
 斥てひき退く。宗政怒て様あり返せ。何方までいと逃蒐にる。この時兄の朝政小はあり
 互小先車と歎びて夫より兄弟一となり。猶田逸人とあける時下河を莊同行
 平岡四郎政長も様念より此著て。高野の涉に陣を固め。落来る者を討んと以ら
 小政は足利有綱嫡子佐野大郎基綱河曾活四郎廣綱木村五郎信綱太田権
 守行朝あど小手差原小悅也あ雲時支ふるをりう。蒲行老範頼始め八田知
 家謙田為成守都宮信房小野寺道綱小栗重成下妻清氏淡川景澄等後此
 小此著て小山朝政少陣に加り。又廣始めとをりて。敵一がくをひり。槍鞭を打て
 引退く。様念勢ハ勝に家ト岡を揚腹と吹き敵を逐ふと二十餘町首を斬り殺知
 是比二十九人を生捕ける。ささば廣をバ洩まといと十分の勝利を得て軍兵大

小勇と歎び生捕と始め討取る所の首とて持来し佐殿に献る。む小山朝政ハ救
 箇所このところの底を被ふるに因て。五郎宗政名代なう。佐殿大少歎びひり。首ハ腰紙小鼻け
 らと擧あげるとくに預らる。さて今度廣に与力たる輩の所領盡く没收せしと宗
 政始め軍功の賞に先行のせのひり。こ小足利又若郎忠綱ハ敢なく又廣敗走と
 跡を埋あせしとひきを身中在所に居がて。今更後悔あせとも詮なく。密小上野の国
 止上の郷。竜が奥に築り居るが所等。桐生六郎が練によりてとて。立出山法道を
 急あび通つと西海小赴きとあ忠綱意の勇士あて人小都るととッあり。ッ小ハ百人ガ
 カあり。ニッハハその声十里に傳ゆ。ッ少ハ齒の長さ一寸なりとぞ。東かて後小山朝政ハ
 のく忠勤と抽けるあぞ頼朝厚く賞しひり。右兵衛尉まこ左衛門尉に補せしは。
 二代将軍頼家の世小及び建仁元年の春二月城四郎長茂練叛く。先亡恭徳の
 弟仔達の高擲と結らひ。まづ頼朝逃討の宣言と請んと。潜ひそかに上系と便宜と窺うへ

然るに一日吉野門帝院の西所へ幸り小山朝政佐々木盛綱京師の守護するに
 こと小供奉以長茂を亡と窺ひ朝政少領を諸番守る所の小山が兵ことを
 固く防ぎ残るこ小放て兵を退け長茂逃に仙洞小到り孫念征伐の宣旨を
 不時に帝へ還幸なりて折しも仙洞寂寥とて長茂幸に面を怒らしことを請て
 再之上皇もその相親を忍ぶるも敢て許さず遙に時の過るりて守護の
 兵の素ると忍ぶ長茂とて出て吉野に隠る朝政彼て兵士を整へ院へ到るに賊は逃
 れとこ小放て彼方と索めるに吉野の方で適所とて逃れ小兵と幸しく跡を逃ひ吉
 野に到りて長茂及び高綱を誅しり因て忽地静謐に及ぶもこ小朝政が勲功
 なりことより後長茂が甥城資盛然後国鳥坂の墨に發る佐々木盛綱とを
 援て盛綱が條にのべり

人皇五十三代
 宇多天皇後胤

源秀義 佐々木源三

定綱 檢非違使
 左門少尉

高綱 中務少尉
 入道

盛綱 左兵衛尉

高綱 四郎左衛尉

成綱 佐々木三郎

信実 加地

盛季 佐々木太郎兵衛
 左衛門尉

佐々木盛綱

卒年不詳

佐々木盛綱者江州之士而頼朝之
 將也勇名稍多馳馬于藤戸以却
 平軍進兵于鳥坂以擒坂額

按るに閑陰筆紀にのぞく佐々木盛綱漁老を藤戸に殺せ何ぞ其殘忍な
 ばやその事の泄ると忍ぶることを一新に執へることを得ざりしめて可なり捕
 正成律備を廢て奇針を吐きえと歎け律備肯いざ正成ことを院へ尋ふこと
 を得ざりしめ事成て後ことを辨以多に仁を合めり云々と云えたり

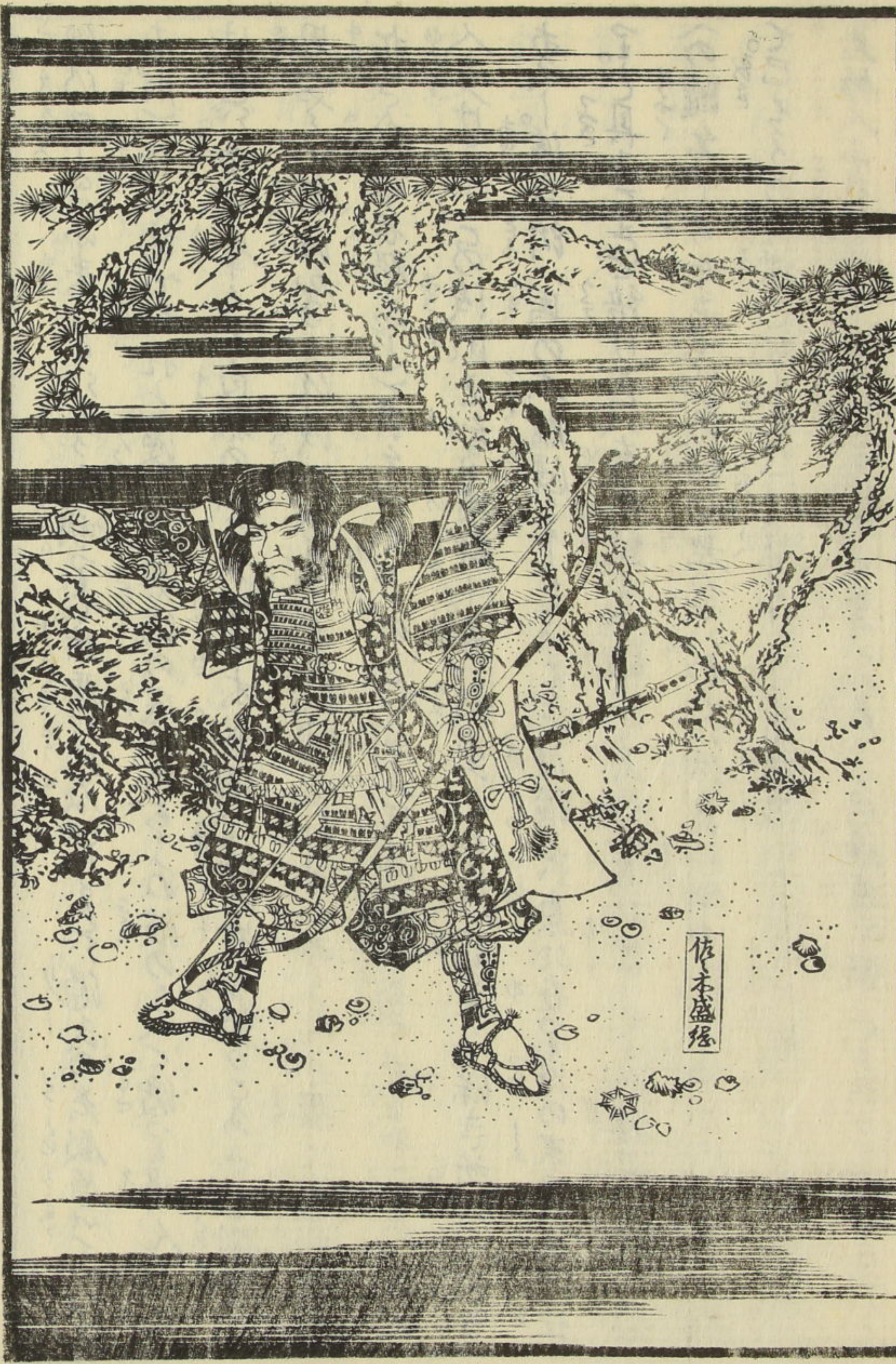
佐々木盛綱の始

佐々木盛綱は、兵と奉りしとき、拓きの人新州で、徳宗軍創の重臣なり。武勇練
 累衆に起て、一世の譽と多かる中に別て、その高名といへる。日本文に、佐々木盛綱の先
 登なり。元暦元年九月十二日、平家退討の、西国へ發向、大將軍ハ、河守範
 頼、萬餘騎の軍兵を率て、都より、立室の津、播磨に著く。そのより、平家小波
 け、小松二位中納言盛丹少將有盛、丹後侍從忠房と大おとて、兵船九百餘
 艘、備前、備前の国見津に上り、こゝで源氏の奇多と候。源氏ハ、船て室の津と立
 備前の、西川尾藤戸小波を取ると、巴兩陣互に海を隔て、その間二十五町、遠小
 波の陣をえざるの、船中かく、探りあけ、は、波るべきやうもあらず、は、佐々木と送は
 活る、おろ、平家の方、おの、波るべき容あきとて、日毎に船探と出、源氏ハ
 陳とさ、拓き、ことまで、遙く、考あざ。如何、あ、は、涉らざる、頼、あ、へ、来り、り、へ

但、心、さ、小、来り、り、ぬ、う、と、潮、を、殆、悪、口、に、及、び、け、は、源、氏、の、若、殿、原、々、小、波、は、
 お、附、て、張、り、雷、と、切、れ、と、漫、々、茶、海、の、底、さ、お、ち、ぬ、波、の、う、へ、と、波、る、と、得、ん、と、難
 け、は、巻、て、摩、り、て、白、眼、の、こ、小、依、々、木、盛、綱、ハ、清、に出、て、彼、方、さ、さ、と、蹶、踏、て
 思、や、う、の、海、あ、ら、は、淺、瀬、あ、る、と、土、人、に、問、ひ、知、る、と、あ、ら、ん、と、潛、り、漁、者、と、お
 拓、き、金、銀、衣、服、さ、と、と、興、え、さ、と、云、く、の、こ、と、同、ふ、に、漁、者、回、答、せ、ら、る、や、う、の、浦、の
 人、多、け、は、と、この、淺、瀬、を、知、る、者、鮮、く、吾、ハ、故、あ、つ、て、こ、こ、と、知、ら、う、深、き、所、ハ、人、丈、も
 あ、ら、な、い、淺、き、所、ハ、馬、の、太、腹、浸、る、や、と、お、い、は、せ、と、厚、頭、少、東、に、在、る、厚、の、末、は、西、に、在
 る、と、具、小、こ、こ、と、語、け、は、去、来、紙、と、小、波、と、え、ん、と、夜、に、来、り、て、その、漁、者、と、伴、ひ、波
 へ、の、隨、々、と、歩、ま、る、に、その、御、小、差、は、お、か、て、は、涉、ら、ぬ、細、あ、ら、じ、と、細、き、竹、で、折、り、立
 て、已、む、う、の、目、標、と、か、し、元、の、汀、へ、船、を、け、ら、う、盛、綱、熟、かり、や、う、下、瀬、ハ、口、の、さ、さ、る、ま、き、若、之
 若、人、小、波、と、語、ら、し、吾、先、登、の、功、を、奪、り、ん、若、と、の、漁、者、と、殺、し、て、その、口、に、滅、せ、ん、と、い、ふ



藤戸の
海小
盛綱
浅瀬
同ふ



佐本盛徳

太刀で引抜き、一刀小かの漁者で刺殺し海中へ抛入り、かくて翌月例のこく平家の陳より船で漕出し、後を渡り悪口ひま下登網家、隸部、延七、八十、騎に従へて海へ颯と入り、大船軍と見て、あま判せよと宣へ、土肥次郎馬近、如何小佐、木殿物小、狂ふ、この大海へ馬と入り、入る、溺はあふ、故軍の笑ひ、狂ふ、さき、大船軍の令なり、控へ、大音声、いへと、佐々木、八、枝、ぬ、慙、か、の、目、標、小、ま、あ、き、こ、る、小、竹、と、葉、に、渡、り、ゆ、小、折、く、深、き、所、も、あ、ま、と、馬、の、太、腹、浸、る、ま、小、あ、ぬ、を、渡、る、軍、勢、促、て、佐、木、の、浅、瀬、を、知、り、入、る、ぞ、續、き、て、渡、ま、し、こ、の、ま、ま、小、三、萬、餘、騎、一、回、小、響、と、双、て、馬、も、入、は、歩、行、ま、あ、ら、う、管、小、把、つ、き、或、ひ、ま、と、ま、と、組、合、し、て、曳、く、声、を、押、ゆ、け、び、さ、り、小、廣、き、海、面、中、の、山、と、な、り、小、け、る、平、家、の、方、向、の、こ、こ、を、見、て、ま、ま、海、中、ゆ、て、射、て、ま、ま、と、旗、を、揃、へ、て、射、出、ひ、矢、の、阜、厚、の、雨、小、吳、な、り、ね、と、勇、と、切、る、源、氏、の、兵、隊、を、願、け、袖、を、翳、故、の、船、小、近、う、て、六、態、を、以、て、

船と引よせ、躍り上りて攻め、かくてその日、暮れ、平家の船、沖に退き、源氏の勢、見、渡、り、上、り、と、是、より、範、頼、豊、後、を、向、ふ、その、功、全、く、登、網、小、あり、と、備、前、の、見、情、を、揚、ふ、と、是、より、後、二、代、の、軍、頼、家、の、世、に、ま、あ、て、小、太、弟、資、盛、の、叔、父、長、茂、に、照、し、ける、が、長、茂、去、野、小、誅、せ、は、小、於、て、居、城、の、後、を、坂、小、指、さ、ま、ま、佐、渡、越、後、の、諸、士、軍、と、奔、り、攻、落、さ、し、ま、あ、り、け、り、と、中、の、城、兵、強、く、を、寄、り、の、こ、の、毎、度、利、て、失、ふ、に、よ、り、急、と、鎌、倉、へ、告、来、る、の、軍、家、評、議、あ、つ、て、射、多、と、佐、木、登、網、入、道、西、念、小、令、せ、ら、る、この、時、登、網、所、領、あ、る、上、野、の、国、磯、部、に、在、る、鎌、倉、の、使、節、汗、馬、と、馳、て、その、右、令、と、述、ぶ、と、ま、ま、登、網、通、門、前、小、庭、跡、と、あ、り、け、る、が、この、右、令、と、ま、ま、一、月、小、舟、入、り、ま、ま、に、從、卒、次、才、に、来、ま、し、と、の、ひ、捨、て、越、後、を、斥、て、進、登、り、從、兵、弟、く、小、選、ひ、續、く、こ、小、於、て、その、家、長、を、輕、忽、心、あ、ら、ん、と、言、い、け、ま、ま、登、網、家、長、を、示、し、て、ま、ま、天、慶、の、昔、宇、治、氏、部、卿、忠、文、東、征、の、令、下、は、小、及、び、着、て、抛、て、来、肉、一、節、刀、を、揚、ぎ、

て宿所小から速に東方に赴くといふ勇士の志を以て善とて何を以て怪
 云 念とせんと衆人少て賊ととりかて鳥坂に馳著て息を継ぎ攻むは流
 賊後依渡の兵士愈々多しとて援く殊に盛綱の嫡子左衛門尉盛季
 通記兵 海野行氏先登りて攻ると急を以て城を危き所小津貞盛が叔母坂額女
 童形に打物で城より故で射るを其の精兵少く一矢由空しうむ多しと
 が為に死傷する者捕多くして碎易せり。當下伝及の豪士藤沢親清城背小廻り
 て是で射るに坂額女が股で貫き股む所を藤沢が兵折重を擒れし。小津は城を
 次第盛盛を棄て逃亡し。城卒盡くたれし。盛綱一戦小功を得て坂額を護送一掃
 念に森の頼家軍士で安んじし
 按るに坂額女力量も勝り。周て甲及の士凌利後遠將軍にまうし。精
 て坂額を賜り伴ひ取り。宿の妻にまうし。

人皇五代
 桓武天皇後
 鎮守府將軍貞盛
 曾孫阿多見四郎
 聖童男北條四郎
 時方曾孫
 平時政 相模守
 義時 右京大夫
 江間小四郎
 泰時 武藏守
 初江間太郎頼時
 時氏 修理亮
 經時 武藏守
 異代執権

平泰時

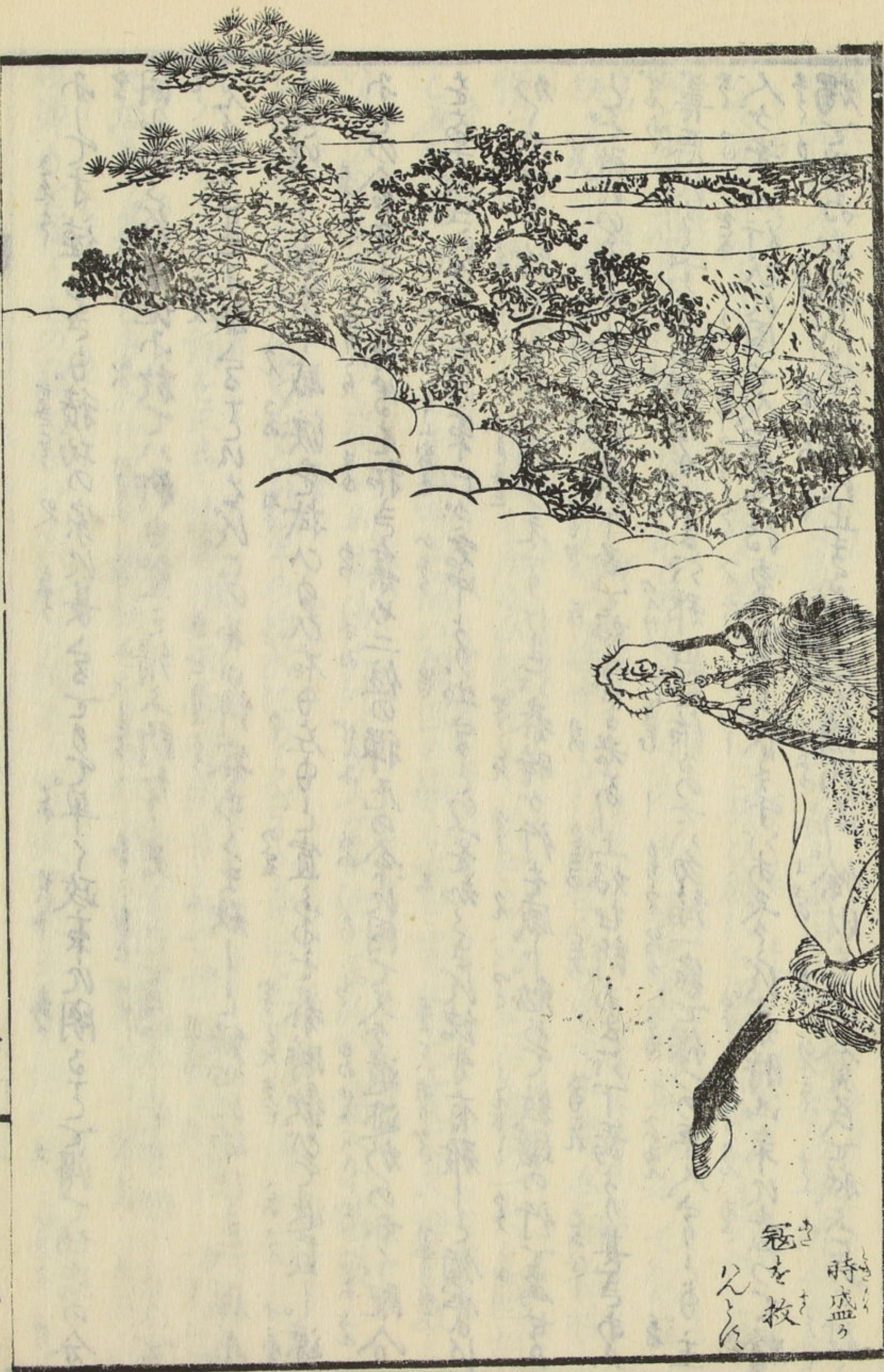
人皇八十七代後醍醐帝仁治三年六月卒
 今安政三辰追 六百十五年成

平泰時者北條義時之子也累世
 執権于幕下故世称副元帅兼久
 之役率軍破敵渡宇治川入洛其
 子時氏徙三帝殺寇敵别立
 天子置六波羅以守京都乃歸鎌
 倉

平泰時の話

允北條氏鎌倉に在て執権言て九世のうち泰時時頼て以て名おと称せり。純
 中泰時が言行を右小治のなり。義久の乱發るを鎌倉管中評議の條小
 皇兵を發して鎌倉を伐んとす。是君として居て伐つ。迷心といへば、然るも
 故なくして天下の動亂を度出さず。子といふも、未だ未だ。その乱を以て忍
 びんや頼に静むるべし。然るも軍旅を懸へ入洛せん。憚るも、然るも箱
 根足柄の險を扱ふ。言て防ぎ難らん。ありけし。二位の尼。大に廣元を
 父愛時より同えして大軍を帥ひ入洛して。平治まに着る。其評議一変り。好ま
 法て抵頼やうの中。東山東海の軍を督し。忽地宇治で破り入洛あり。帝
 隱岐小瀬院に在るに。清門院を。遠國に幽し。是より兩六波羅を置て。京師の守護と
 土佐不遣。奉り奉るなり。を。二位の尼。是より兩六波羅を置て。京師の守護と
 以て。是より兩六波羅を置て。京師の守護と。

のべく。びかて元仁元年泰時の後室隠鎌の事あり。蓋後室の泰時の継母に
 一と幸にこそを憎む。と。泰時愈々。言に奉ると。慈母の如し。泰時卒
 去るに及び泰時その家跡を嗣を嫡。泰時を廢して。生る所の政村を執権
 とあり。まに鎌倉の王頼を廢し。二浦及村が婿宰相中。實雅を將軍
 とせん。及村が弟小倉。その密謀。二位の尼。言て。大に廣元を
 村で責問。及村初め。陳。二位の尼。言て。大に廣元を
 村陳謝。まに。終小實。言て。二位の尼。言て。大に廣元を
 の北條に。誓。言を遠國に。言て。その年九月二位の尼。言て。大に廣元を
 泰時の遺。言て。諸子の。言て。泰時を。言て。多寡を。言て。披きて
 こそ。言て。泰時。言て。滅。言て。禪。言て。汝。言て。家の。言て。嫡長
 として。言て。新。言て。滅。言て。何。言て。綱。言て。泰時。言て。恩。言て。家



時盛
冠を
救
ん



北條

北條
泰時
單騎

牆に圍げども外其侮を守るべしと今日の難に於て他人の力も乏しくし得ん我の建
 曆素久の六教に異ならずとて敢に初め如くあり。と回答にけはるる事とて彼人よ
 威渡を執ひあはば登烟火小敷喉にとある個是より為安貞二年正月孫會が
 發授し甲冑を帶して軍勢を府に競ひ集るる事何の故とあるは泰時以為
 若復賊との弊に乘りて大軍起らん。獨小兵を遣るに若しと尾藤左近平
 二部統防兵衛尉等して詐呼で寇賊の指津川の邊に在るとま先に建世せ
 集會し軍兵と見不統てとま被死へ馳せり。と幕府忽地靜謐せり。と云外
 に抵つて若てはも一人の寇賊なり。始ては謀士を誘ふに鎌中と靜めん為の事
 人よ泰時が秀針を感せ。この條周の幽王が廢奴の為に烽火を奉りて
 泰時が失策として或人誘はる。然れども是を慮ふは彼の指き集むる是れ自然に
 来る所を執きしめて事ハ殊なり。法其策とものへうらば

金水鑑で按るに鎌倉の執権九代のうち泰時廉直にして己で懐之使節を
 行ひ仁惠を無と民と救ふをりてあはれは任とせ世有難き善人あふや。然れ
 ども猶七の徳の及ぶる所あり。既に後守時登り鉞に法盜あつて白晝に
 法備を鄙ふ。然らば泰時軍家の府内に於て。ある時登り執権の連枝
 ある。是を三三憚らざる。いと怪しきことあり。また天福元年秋八月泰時
 奉幣の為授給に術つ前漢の考りて到り。死傷の者も著るに因て神評と述
 び鉞に還ると犯科の者を捜し求めしむ。若平左衛門尉といふ老賊を捕へて
 是を執り鞫問するに博奕より起り。その教を刺殺せ。と云に因て國中に
 令一切博戲を禁せしむ。蓋世間の廣きもの如きの犯科人あり是非に
 及ぶ。既に入を殺し前漢の考に捨して執権の通行に至つて始めて起る。と云
 その傍に人あはれ如し。と云ふこと効もせず。登坊録報の輩絶せ実に靜謐

の世といひて。百六十六年春時。のとき忠臣の士を多く思慮を悩まして下情は
通せざると忠臣大將と聽所の前懸け。所人をしての鐘を撞く自ら
出て行つては。是れを解いて。と。是れ漢土光帝の衛室。帝の善
の旗。高王の徳。鼓湯王。總樹の庭の故。束と想。傍。と。りのあ。一。統。中。及。敗
式。同。五十。箇。條。を。撰。す。且。今。捕。印。刻。と。世。に。傳。ふ。遠。く。所。論。を。絶。賞。罰。を
亂。ま。の。輩。の。威。を。假。り。て。初。申。す。且。六。野。國。の。と。あ。に。より。忠。臣。の。士。十。一。人。を。擇。り。
判。者。と。あ。り。て。と。日。を。究。む。賄。賂。の。為。私。曲。あ。ら。ん。と。欲。ま。然。且。ど。も。の。所。
兩。版。に。置。て。一。檢。あ。ら。ず。是。に。於。て。盤。銘。を。刻。ん。が。為。去。昔。元。康。運。等。と。相
縁。と。定。む。と。是。より。邪。説。の。者。莫。く。黎。民。悉。く。怡。泰。以。と。え。は。且。生
涯。穢。に。在。て。心。を。用。う。る。と。後。世。の。執。事。孰。も。右。に。出。ん

足利義氏

八皇八十八代 後深草帝建長六年卒
今安政三辰迄 六百三年成

足利義氏者頼朝之親戚也建曆中
和田一族反時義氏仕實朝公守營門
拒賊且身自與朝夷名義秀相當其
功拔群卽是尊氏之先也

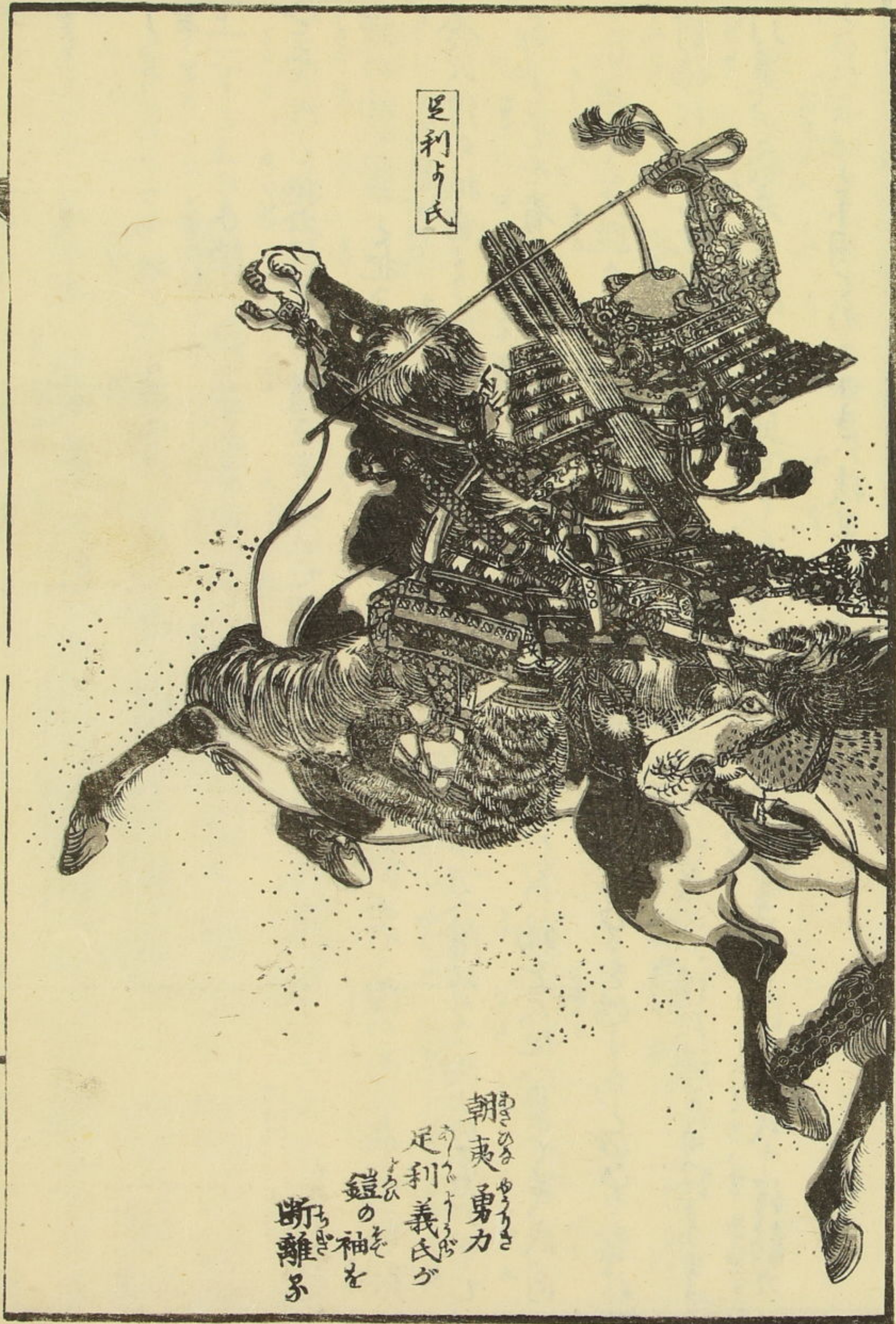
接るに及氏先武部大捕等國八上野の國新田に依りての一本に及義秀四男及
そして下野の別業和以下に及えり。及家園東下向の足利左太弟基綱の
宿所以下著以の時基綱の息女と嫁し男子と産むは及國なりと云

鎮守府將軍兼
陸奥守義家ノ四
男從五位下式部大
夫義國ノ孫
源義兼
足利上總介
義氏
足利左馬頭
從五位下
義氏
官内少輔
賴氏
尾張三郎
左馬介

足利義氏の結

前にいふごとく、義氏元來頼朝の親戚、言はくは西門とて、諸士自ら出せしむ。その父上総介良兼ハ、治承五年二月朔日、頼朝卿の媒にて北條時政の婿とある。右大納家の所甚所、政子の四方の妹とて、不於てその家倍、榮榮とてを得たりと。則義氏ハその腹に儲けて、時政の外孫たり。義氏も武藏守、恭時の女と娶りて。官内少輔、恭氏を産む。恭氏も、恭時が子、仲理亮、時氏が女を娶はらるる。北條と、救世の婚家、うぬに親睦大に渥りけり。かくて建保元年五月二日、和田一家の乱、出来て、諸士東西小争を、鎌中、鼎の沸く如く、義氏並に甲冑を履ひ、柳營に馳著て、守護せりと、嚴重なり。和田義盛ハ、縁て、由共力、佐黨の人、救を請ひ、嫡男、常盛を、始めり。親戚朋友、百五十餘、騎兵、共は千餘人、之に分つて、幕府の南門、相模守、時之亭、西北の西門をうち圍む。二を之に攻まると、所所の

西南横大路に、奇るに、周て、政所の前、に於て、所家人、皆、まて、支え、死傷を多し。り。于時、波多野中務丞、忠綱、先登、に進み、是と防ぐ。は、浦左衛門尉、義村、も、池く、この隊に、加り、ける。その、骨、肉、の、割に、及んで、和田勢、幕府の、四面を、圍む。恭時、朝、時、義氏、等、兵、略を、盡して、是と防ぐ。は、朝夷、之、部、長、秀、所、所、の、惣、門を、衝破り、南、庭に、亂入して、攻撃を、急ある。久、利、火を、所、所、に、放つ。ま、に、依て、お、軍、家、火を、法、華、堂に、避こ。ま、朝、夷、義、秀、極、威を、震ひ、前、に、進こ。五十、嵐、小、豊、次、昔、貫、之、部、盛、重、新、野、と、左、近、衛、景、季、連、徳、羽、連、宗、以下、の、數、輩。ま、あ、秀、秀、に、討ら、は、高、井、重、茂、義、秀、と、相、互、に、馬、より、墮し、つと、重、茂、敢、て、首、を、さ、は、相、模、次、部、朝、時、也、一旦、義、秀、以、て、一、合、し、が、疵、を、蒙つ、て、引、返、り、ま、下、足、利、之、部、義、氏、政、所、の、前、に、在、る、橋、の、傍、小、固、り、朝、夷、之、部、池、来、り、そ、ま、に、口、渡、つ、て、は、足、利、殿、と、見、し、は、御、目、を、先、刺、し、り、多、く、け、人、に、出、會、て、勝、負、を、争、入、と、心、惜、き、敵、に、違、ひ、と、一、戦、仕、ら、し、進、こ、う、ま、は、義、氏、也、の、い、ふ、如、く、及、ぶ、ま、は、り、



朝夷勇力
足利義氏が
鎧の袖を
断離す



君玉堂
龍林

其の同い道けき五ノ弓者把にむを太刀で引抜き其甲以駑一級塵のさえ
 と秀秀がうち込込太刀を右に之ら透を覗つてと伸し突んとするに才で捲り一
 上下と五の練人難中せそ半時なる東風西風戦ひしが其氏何とてうらん太刀
 て身裡と抽出以秀秀透さも端邊で切んとする引外せば這ハ残念と左も伸して
 獲の袖と緊と把る其氏組て六懐ハトと案う波馬以一敵あて隄の西に飛ぶ其の御
 倉に獲の袖宙より切て二枚朝夫の子に残ま主ハ世方へ除にりり兩士の勇力甲乙
 ありとを看にける軍兵皆嘗て打て称讚以朝夫ハかの袖を大地へ棄て其氏同
 かけ橋の上は跳り登はに従者入中で遮り遠らと留むを妨するとのひ々數れ
 前拂にひきつて首を捨て四五倍極まり見るとこの間に其氏ハ遙に遁まのよりま
 引違つて朝夫ハ米町の方へ逃れて丸を渠に命活るありを其氏ハ得筋力
 とのひ々暗と不周て其の如き後世までの美談とせり

北條家	平泰時	武藏守
時氏	修理亮	
經時	北條時義	武藏守
時頼	左近大夫	
時宗	右馬権頭	左衛門大夫

平時頼

人皇八十八代 後深草帝弘長三年卒
 今安政三辰迄 五百九十四年成

平時頼者有智畧有威量嘗察三浦泰
 村之有密謀而急攻殺之遂廢將軍頼
 嗣迎宗尊于京師而奉之為幕府世称
 副元帥後號最明寺道崇

時頼建長とて建宗の蘭溪を以て園とて其蘭溪ハ西蜀の人とて姓を冉氏之年
 十に於て難發其明の性禪寺とて以て依て法を受く我朝禪の盛多とて其時頼号
 を依て常樂寺に居り其寺蘭て建長とて号し一族没死の輩の真福を吊ふ

平時頼の結

倍向時頼の事蹟に於ける。かの謡曲にありて時頼行脚微行あり下野に於て
 源光朝門幸世にありし夜梅松栴を伐て多と防むる事。その素姓と志を聞き後
 倉に歸りて後兵を募は果して幸世の中に在ると因て三箇の莊を授くといひ此
 車人に勝多まといふ。東鑑に新見ありき。実録となり。雅。但同書に弘長
 の年と開く。強ていふ。その時之といふ。思ふに。微行の。是より後徳治
 二年北條貞時微行の事あり。北條紀及九代系記に。あるを軍家鑑及び王代
 一覽に載せ。さういふ。疑ひありて。結を。蓋貞時。最明寺。時頼。先蹟を遺ひ
 微服潜行と。緒及を。経歴。刺史の善悪を。親民の難易を。察み。かくて。城南の。歌
 官を。遊ると。き。二朝の。後屋。に入ると。水を。求む。時に。三十。なる。男。貞時。を。迎ふ。その
 さ。五。端。正。にして。野。を。以。貞時。怪。そ。その。姓名。を。問ふ。始め。答。へ。び。於。問。て。再。之。に

して包むてを得。以。我。の。正。又。我。内。大。局。通。基。なり。徳。人。の。為。に。論。落。を。官。藉。を
 削。ら。し。未。地。を。没。収。せ。ら。る。然。ま。ど。も。正。令。と。更。に。愁。ある。容。の。わ。り。貞。時。は。て
 元。来。罪。あり。さ。ま。つ。後。倉。に。到。り。府。君。に。告。て。奏。す。不。達。し。その。冤。を。免。せ。る。事。の。然。る
 べ。し。通。基。の。も。否。然。ら。ず。君。毀。言。を。容。て。我。を。賤。ま。我。の。怨。あ。り。故。て。奏。す。を。
 君。の。逆。を。奉。は。り。て。我。志。に。あ。り。て。自。時。は。て。感。涙。を。拭。ひ。を。所。を。去。り。り。後
 降。落。して。その。工。を。奉。し。通。基。を。て。本。官。に。復。し。封。地。前。の。如。く。に。賜。ふ。事。幸。世
 が。み。し。その。執。柄。を。是。の。工。で。取。合。を。被。謡。曲。に。綴。り。あ。り。ん。く。爰。貞。時。頼。執。柄
 の。職。に。あ。り。と。き。三。浦。一。家。及。逆。の。工。あり。その。故。に。前。將。軍。頼。隆。飯。落。す。て。その。子。頼
 嗣。八。歳。あり。と。頼。隆。の。王。子。なり。あ。り。ん。か。る。幼。稚。の。君。君。を。遣。し。飯。落。し。ゆ。り。北。條。一。家。に
 權。勢。將。軍。家。を。後。に。至。ま。つ。後。に。災。害。あ。り。ん。と。思。ひ。自。身。退。隱。し。あ。り。ん。と。その。初。め
 三。浦。光。村。跡。近。し。奉。は。り。と。二十。餘。年。と。小。能。て。別。き。と。惜。し。飯。落。の。世。供。あ。け。る。と。緒。士



八

貞待



時頼が徹行の
先蹤を遂ひ
貞待隨行
久我内府より
常世の
衣柄小
芳華

鑑念に帰るに及び先村ハ猶系陣に注まり北條一家を滅して再び鑑念に逢へんと約
 密に一族と相討つその兄之浦泰村ハ固より時頼と睦まじく時頼常に政
 務を補ふもここに依りて泰村の威権衆人小絶るといふと後とて是よりとせよ一族と
 共して終に縁及びこ小秋田景盛入道九景盛其子城介景盛等誘て泰村と権
 を争ひ這面及逆の工とて密に時頼に告るといふと時頼こまを信しせよ一日時頼
 服忌を避んと泰村が飲に至る泰村こまを僥倖とて密に衆人心を察し時頼
 急ぎ飲に帰り使者を以て泰村と継責以泰村をこまを陳謝し終に和解
 とて誓状を送り泰村が威日末に信以景盛入道一族を聚め泰村大罪ありと
 いふと時頼寛宥して和平せしより泰村ますます権威を震ひ諸士を侮り上を
 凌ぐ吾家もまこ亦族せしとん若トこまを殺んあはこまの族に合解して九
 郎泰盛大若称長泰武藤景頼等を始めとて兵を聚りてと浦泰村が甘繩の

鐘を懸ふ泰村怒つて是ハこま時頼盟約に違けりと謂て矢石を飛し固く防ぐ
 時頼もまこの擾亂を听泰村の和親ハ絶ありきと後悔してその弟北條六郎時
 定を以て景盛を援む景盛が兵力で得て責難工と志急あり泰村兄弟士卒を
 勵し死力を盡して防ぐといふと終日の戦ひに入換る勢なり今ハ矢盡き力窮は
 こ小秋で泰村光村毛利西阿岡政泰の族の二族二百七十餘人法華堂に批入り
 故幕府頼朝卿の影前あておく自殺ありたりこまとて浦の札といふと幕府
 に仕へてより今室治元年ま六十八年以てと浦滅び大介を明く夜半の忠死もと小秋りて
 空しくあまの時頼歎息せしとん是より四年を経て建長二年の以前將軍路
 江在て頼朝の縁の企ありて行法師といふもの出有て果て關東に下り一味の諸士
 を潭んといふ武藤景盛とておつて行を捕へて時頼に送は時頼長を鞫問せり
 にその事分明なりけしと關東に在る所の頼朝同士の仇を捕ふかくて北條相摸

守重時是より為六波羅在にて鎌倉に据きて政事の補佐とせしむるに於て重
 時と相繼し頼朝の職を廢し鎌倉の王を擯んとせしむるに於て武藏景頼和泉前月行
 方を系師に遣し奏し請て後醍醐の上皇弟の皇子一名中務卿宗尊親王と鎌
 倉將軍とせしむるを。上皇許容し之に許し。頃、建長四年夏四月。鎌倉に近奉
 親王系を出るべしとせしむるに於て。その行旅善美を盡し。上皇栗田に微行し之を
 内とせしむるに於て。八月五日。征夷大將軍に任じし頼朝職に在りし八年。十四歳に
 て洛に歸りしに於て。かくて後康元元年。時頼七の年。二十に之職を武藏守長時に譲り
 最明に降し。法名通宗と稱し。時頼佛系に傳す。とて文應元年の春。正月
 緒国に令じ。六月。日及び二季の彼岸に殺せ。禁ば。弘長二年十月。最明に於て。年
 の歳二十七とせしむる。

日本百將傳一夕話卷之八終

